

表8. 与那城漁協におけるタイワンガザミの漁獲量と天然稚ガニの定着数、放流数などの推移

(単位: トン、万尾、mm)

年	漁獲		天然		放流		場所
	量	数	定着数	数	サイズ		
1983	7.5	4.7	---	0.4	8.0	平敷屋	
1984	6.2	3.9	---	1.2	8.0	平敷屋	
1985	4.0	2.6	---	1.2	8.3	浜、平敷屋	
1986	10.3	6.2	103	0			
1987	6.2	3.5	46	6.7	6.0	平安座、浜	
1988	---	--	71	9.8	7.5	平安座	
1989	5.0	3.4	11	16.9	7.4	平安座	

1986~1987年が6.0~7.6%であるのに比べ、1989年は30.9%と高い値を示した。この漁獲尾数割合は、漁場における稚ガニの生存率と漁獲効率を合わせた値を示し、1986~1987の数値が概ね順当と考えられ、1989年の高い値は天然の稚ガニ以外の放流カニの加入を示している。1989年の天然と放流の稚ガニ総数に対する漁獲尾数割合は、12.2%で、以前の数値により近い値を示した。天然と放流の稚ガニ数割合で計算すると、本年(1989)に漁獲されたカニは天然群が1.3万尾(1.9トン)、放流群が2.1万尾(3.0トン)となった。

本年は、天然稚魚ガニの定着数が少なく、その定着数を上回る稚ガニ放流を行った結果、放流群が天然群より多く漁獲され、稚ガニの放流効果は大きく顕著であると考えられた。しかし、放流効果の判定は上記のように単純でなく、天然および放流稚ガニの加入量や生残率、成長、移動など、漁獲ガニの年級群分離や漁獲効率など、漁獲および放流量の年変動などを把握し放流効果を判定する必要がある。今後、放流技術開発事業を継続実施し、これらの資料を集積し、放流効果を明確にしていく必要がある。

要 約

1. タイワンガザミの種苗生産を県栽培漁業センターで実施した。
2. 漁協での親ガニの取扱い、ふ化までの親ガニの飼育の改善により、ふ化槽での沈澱が減少し、ふ化幼生の飢餓強度が高まった。
3. 上記の改善点と、ゾエア幼生飼育中の有機懸濁物投与等の水作りにより、Z₂までの生存率が高まった。
4. 最も成績の良かった飼育例では、1水槽当たりの生産が32万尾、生産密度が3,200尾/㎡と今までの最高事例となった。年間の生産数も67万尾と過去最高を記録した。
5. Z₁~M期の消耗防止は依然として残された問題である。今後この時期の栄養強化を中心に検討していく必要がある。